

三条市租税教育推進協議会長賞

税に対する意識

三条市立大島中学校 三年 鈴木 葉子 すずきはこ

「日本ほど増税に厳しい国はない」

日本では、消費税を上げるといふ話題が出るたびに大きな反発が起こっています。私もあまり増税はしてほしくないと思っています。以前、租税教室を受けたときに、スウェーデンの消費税が二十パーセントだと聞いてとても驚きました。しかし、スウェーデンの人たちは日本人のように文句を言ったり、反発したりしないそうです。なぜこんなに税に対する意識が違うのか興味を持ったので調べてみました。

北欧諸国に「ゆりかごから墓場まで」といふ言葉があります。この世に生まれてから去るまで、社会全体で面倒を見ましようという意味で、第二次世界大戦後にイギリスのウィリアム・ヘンリー・ベヴァリッジという人が掲げた言葉だそうです。スウェーデンでは、「胎内から天国まで」とも言われています。スウェーデンは、国民の税負担はかなり重いですが、徴収された税がきちんと国民一人ひとりの福祉のために使われているという実感があり、自分になにか問題が起こっても、国が守ってくれるという安心感を国民は持っているそうです。税金で安心感を買っているとも考えられます。

一方、日本では、税負担率は他の国に比べて軽いものの、税金

で自分が支えられているという実感がありません。高齢者や生活困窮者などへの福祉は手厚いイメージです。しかし、その分、他の国民は自分たちは恩恵を受けていないという不公平感を抱いているようです。また、税金が何に使われているのかはつきりとわからず、政治家が無駄に使っているのではないかと思う人が多いのも日本で増税が嫌われている理由です。

北欧は「お金持ちも困っている人も平等に支える」といふ財政のコンセプトがあり、日本では「自分ではどうにもならない人を優先的に支える」といふコンセプトがあるそうです。私は、日本も増税をしてもいいから、北欧のように一人ひとりがもつと安心感を持って生活できるようになるといいなと思いました。また、税金の使い道についてあまり公表されていないので、ニュースなどでもっと発信していくことも大切なのではないかと思います。税金は大切なお金なので、税金へのイメージが良くなるということです。